

【シンポジウム】日本の「姿」・「かたち」 一目に見えるものと見えないものー

2013 年 11 月 16 日（土）13：00～15：00（於：34 号館 B 301 教室）

提題者：藤森 馨（中国語・中国文学専攻）

内田順文（地理・環境学専攻）

玉木一徳（考古・日本史学専攻）

日本人と神社

藤 森 馨

一、神社とはなにか

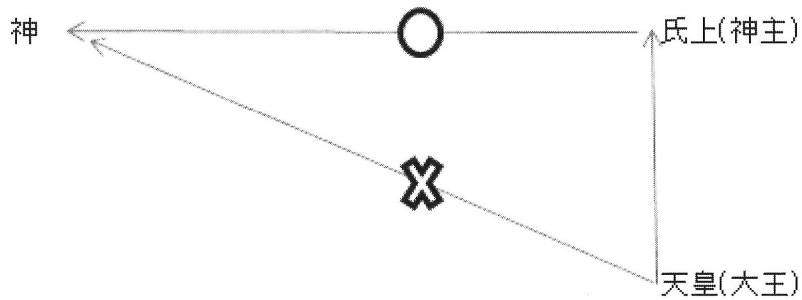
神社とは、日本独特の施設です。もともとは、社殿もなく、山・川・湖・太陽など自然物を崇拝していました。具体的には山を御神体とする大神（おおみわ）神社や島嶼を御神体とする宗像大社などが、その代表です。

出雲大社のように大王の宮殿と同様の豪族居館型もありますが、7 世紀に幣帛（献上品）を収納するため、社殿が多く建立されるようになりました。

神社で奉祭される神々は前述のように、自然神でありましたが、善神・悪神の両義性を持っていました。例えば、今年の梅雨は空梅雨とよばれましたが、その後全国的に豪雨が降り、大変な災害をもたらしました。良い面は善神ですが、悪い面は祟り神と畏怖されたのです。同じ神といっても二つの顔を持っていたのです。

こうした神々は、もともと各氏族によって奉祭されていた、と考えられています。天照大神を頂点に全国の神々を序列化し、奉祭していたとするのは、明治国家の大いなる誤解であり、氏族祭祀には天皇もアンタッチャブルであったのです。たとえば、平安時代中期に将門・純友の乱平定の御礼として、天皇が賀茂神社に行幸することが始まりましたが、天皇は、鳥居の外から勅使を立てることになっていました。鳥居をくぐって、境内へ入るということはなかったのです。その後の春日大社行幸や平野神社行幸も、こうした先例を踏襲しています。図にして示すと次のページの図のように、天皇は各氏族のトップである氏上を介在させて神社に祈願をしていたのです。私は、こうした信仰形態を委託型祭祀と定義いたしております。

そうした例を、記紀により紹介すると、第十代崇神天皇の時代、疫病が流行し、猖獗を極めました。天皇（大王）は斎戒沐浴して、何れの神様の祟りか、を祈りました。ある晩夢枕に、オホモノヌシという大三輪山の神が現れ、自分を祀れば疫病は沈静するであろう、といったのです。天皇は早速神を祀りましたが、その



験はありませんでした。そこで、再度神に祈ったところが、自分の子孫であるオオタネコに祀らせれば、疫病を鎮圧することができるであろう、という託宣を得たのです。天皇はオオタネコを国中に探求し、神を祀らせたところが、疫病はたちまち沈静したといわれています。

この話は律令祭祀鎮花祭の起源神話にもなっていますが、神の祟りは、その神の子孫でなければ、鎮めることはできない、という神祭の特徴を良く物語っているといえましょう。換言するならば、神々の祭祀は、その子孫の手によって始めて執行できると、古代には考えられていたであろうことの証拠と思われます。

古代の人々は、現代人には想像もできないほど神々の祟りを畏れていました。いや、今日でも降雨の有無で、雨乞いなどが行われているぐらいですから、古代の人々の気持ちを付度できないわけではないわけではありません。富士山は見るだけでは恐ろしくありませんが、一度、噴火をすれば恐ろしい。他の山岳や島嶼なども同じであったのです。

二、神祭りの方法

では、具体的な神祭りはどのようなものであったのでありましょうか。神籬(ひもろぎ)といわれる常緑樹に鏡・剣・幣などを取り付けたものに神を迎えお祀りする。その場合磐境(いわさか)などで結界をまず作ります。また、磐座(いわくら)など磐を組み立てて、神の降臨場所として祀る方法もありました。以上の他、今日でも伊勢神宮で最も重要な神迎えの施設とされる柱を立て、天平瓦という土器で囲いさらに桷で飾るという方法があります。この柱を心御柱といい、正殿下の庭上に立てられています。神宮では六月月次祭・九月神嘗祭・十二月月次祭を最重要な祭祀と位置づけていますが、由貴大御饌(ゆきのおおみけ)は、実はこの心御柱の前で執行され、正殿では行われてはいなかったのです。つまり、古代の社殿が存在しない時には、祭りのたびごとに、臨時に上記のような施設が作られ、祭祀が執行されていたものと推測されます。伊勢神宮は、今日でも古代の祭祀を継承しており、その祭祀は注目すべきものがあります。

ところで、「延暦両宮儀式帳」という文献があります。延暦二十三年（八〇三）桓武天皇は、律令の追補修正である格と施行細目としての式の編纂を企図しました。その方針に対応して翌年神宮（内宮・外宮）の祭祀などの実態が、国家に報告されました。それが「延暦両宮儀式帳」で、それを基に「弘仁伊勢太神宮式」が編纂され、最終的には「延喜伊勢太神宮式」として結実したのです。古代の神社の祭祀は、記紀や六国史からはうかがえません。格や式などは、国家側からの立制であるため、具体的には、在地の神職の戸単位で執行される大食饌祭祀などはわからないのです。したがって、考古学的視点より迫るしか方法がないのが実態です。しかしながら「延暦両宮儀式帳」には、式などでは意図的に削除されている現場神職の動きが詳細に記されています。大御饌祭祀は、禰宜^{オオミケ}や童女^{ねぎ}である大物忌^{おおもものいみ}やその父などによって漆黒の闇の中で行われたこと、遷宮は禰宜の一家をはじめ一族の男女によって執行されていたこと、特に禰宜一族の女性の参加は、後世の女性禁忌の視点を再考させるものといえましょう。

私は神道史を研究する立場から、奈良時代までの神社の記録として「延暦両宮儀式帳」は、看過できないものと考えています。全国に八万社の神社が今日も存在しますが、その具体的祭祀などを伝える神社を寡聞にして存じません。そうした点からも本書の重要性が理解できると思われます。

三、由貴大食饌祭祀と筑波の神

関東に雄岳雌岳が聳え、その美しい山容から厚い崇敬をうけている筑波山は、山自体をご神体とする神社です。『常陸国風土記』には、この神社に関する興味深い伝承が見られます。

昔々、祖神が同じく美しい山容の富士山に宿を取らして下さい、とみすばらしい姿で言ったそうです。その日は、祖神が帰ってきて、新嘗祭をする日でした。富士山は、みすばらしい姿をした祖神をまさか祖神とは思わなかったのです。「今日は新嘗めの夜、一年で一番めでたい夜に何という客であろう」と追いついてしまったのです。

怒った祖神は、次に筑波山に行きました。筑波山は「今日はめでたい新嘗めの夜お客さんも一緒に」といい、祖神を温かく迎えたそうです。そこで祖神は筑波山は年中緑の美しい山にし、富士山は夏でも雪の降る山としました。

このように神々を一泊二日でおもてなしする。それも正直な心で、というのが神祭りの作法でした。伊勢神宮で執行される年三回の由貴大御饌祭祀も全く同じもので、夜十時ぐらいに夕大御饌、御神殿で一泊していただくように、寝具が備えてあり、翌早朝三時人が見ることのできない時間に、朝大御饌を奉り、天上の世界にお帰りいただくことになっていました。

日本人は、おもてなしの心を古代から大切にしてきました。その姿が今日の神祭りに継承されている、といっても過言ではないでしょう。国家神道の時代、神社は歪曲されて理解されてきましたが、それはあくまでも歪曲された姿です。皇室祭祀も神宮祭祀と同様であり、皇室祭祀の延長線上に伊勢神宮の祭祀があるといっても過言ではないのです。

今年は二十年に一度の遷宮が執行されましたが、なるべく「延暦両宮儀式帳」に近い形で執行されました。こうした伝統を継承するという文化は、平安時代にも見られます。応仁の乱で遷宮は一時中絶しますが、仮殿遷宮などで技術は絶やしませんでした。だからこそ、近世初頭に復興できたといえましょう。

「おもてなしの心」神道のこうした精神が、茶道や華道などといった日本の伝統文化をはぐくみました。世界的に例を見ない日本人の真面目な行動や技術に、「おもてなしの心」言い換えるならば、「真心」が今日にも脈々と受け継がれていると感じざるを得ないと思います。